

天理図書館『開館九周年記念 古事記・日本書紀展覧会目録』紹介

田 中 千 晶

明治末及び昭和十年代に、『古事記』に関する記念祭や展覧会が行われた。「古事記撰上千年二百年記念祭」「古事記まつり」「古事記展覧会」⁽¹⁾等である。これらの展覧会の開催状況や目録等の詳細については及川智早氏による先行研究を参照されたい。このうち一九四三（昭和十八）年一月三十・三十一日の二日間で行われた「古事記展覧会」は、参観者が「会場入口に長蛇の列をなす盛況」であったと当時の新聞記事が伝えている。⁽³⁾三つのイベントはいずれも東京での開催であったが、地方においても同様の催しが開催されていた。その一つは、一九四〇（昭和十五年）年十一月九日・十三日に開催された、名古屋における「郷土関係古事記・日本書紀展覧会」である。及川氏によれば、『名古屋新聞』『中京讀賣』『新愛知』等の地方紙に記事が掲載されたようである。⁽⁴⁾このようなイベントは、当時の人々にとって『古事記』を「体感」し受容する機会として大きな役割を果たしていたことだろう。

本稿では、このほかの地方で開催された展覧会について紹介する。それは、奈良県天理図書館にて一九三九（昭和十四）年十月十八日・三十日に開催された「開館九周年記念 古事記・日本書紀展覧会」である。当時の周辺状況及び『目録』の一部を紹介する。

* * *

天理図書館は、一九三〇（昭和五）年の開館以来、毎年「開館〇周年記念展」を開催している（但し一九四四（昭和十九）年は開催せず）。その第九回が「古事記・日本書紀展」であった。『目録』によれば出展数は「二年間主要増加書」が七一点、『古事記』『日本書紀』関連書が三四二点にのぼる。天理図書館では、基本的

他所から関係資料を借用しての展覧会が行わないため、蔵書および天理教信者の寄贈とみられる。開催期間中には講演会も催されたが、当時の新聞には関係記事が見られない。⁽⁵⁾しかし、天理教の週刊機関紙である『天理時報』が展覧会の予告記事掲載している。一九三九（昭和十四）年十月十五日一面に、「圖書館で「記紀」展重要資料多数を出陳 十八日には記念講演會」として、

圖書館では十八日開館九周年記念日を迎へるが、當日午後一時半から同館講堂において第三高等學校教授阪倉篤太郎氏の「記紀について」と題する記念講演會を開催、併せて同日から三十日まで古事記日本書紀に關する展覧會、一年間増加重要書展覧會を催すことになり、準備を急いでゐるが、古事記日本書紀展は出陳總數三百點にのほりその中には

靈元天皇御宸題 後水尾天皇御製集、後陽成天皇勅版『日本書紀神代卷』（二冊）本居宣長自筆の『古事記傳神代の卷第三卷』（一冊）同『古訓古事記』大小二版の板本（一二二枚）等の得がたきものがあり

殊に宣長自筆の『古事記傳』は現行本以前の稿本で『古事記傳』發展の上からして重要な資料となるものであり、全體を通じて見る時は記紀版行の歴史を物語ることになり、日本精神昂揚が叫ばれてゐる時、これは大いに反響を呼ぶこと、思はれる。なほ増加主要書展中の目ぼしい出品としては

うつほ物語の五卷大繪卷、伊勢神宮の年中行事記録たる『古老口實傳』の最も古きもの、法隆寺一切經の國寶級たる『華嚴經』等がある。

とあり、『古事記傳』の写真が付されている（図一）。

阪倉篤太郎の講演題目は、実際には「古典と国学」であった。⁽⁶⁾記事中には見られる

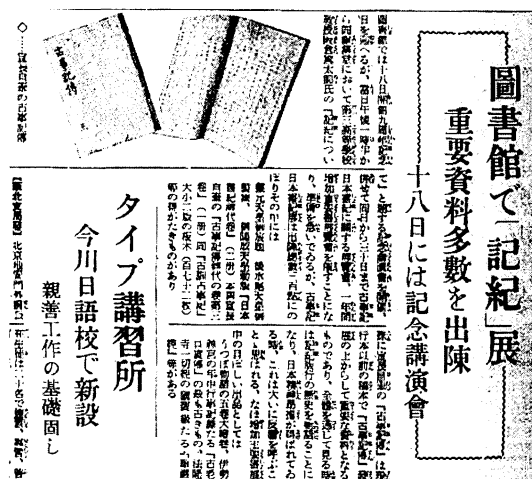


図1 『天理時報』の記事

「日本精神昂揚が叫ばれてゐる時」とあるように、当時はまさにアジア・太平洋戦争時局下であり、ここに「記紀」と時局との密接な関係が示されていよう。

実は天理図書館では、『古事記』『日本書紀』に関する展覧会はこれが最初ではなかった。同年である一九三九(昭和十四)年一月末―二月、天理教の春季大祭にあわせて「日本精神関係書展覧会」が開催され、『古事記』『日本書紀』『万葉集』の古写本およびその注釈書類が出陳されていたのである。この展覧会では「日本精神のあらゆる部門において、先づその根本に歸ることを必要とする上から今回は日本書紀、古事記、万葉集について貴重書、原本の姿、その解釋書及び現代の日本精神関係書を系統的に陳列したもの」であった。この『目録』⁸⁾によれば出展数は一〇一点で、後の「古事記・日本書紀展」に比べれば三分の一以下であった。しかし徐々に「日本精神」に関する書籍を追加したのである。ほかに天理図書館は、その研究雑誌『日本文化』十六号(昭和十四年四月)で「日本精神號」とする特集を組んでいる。そして『天理図書館四十年史』によれば同年の「さらに六月、古事記・日本書紀を中心とした「国史講座」を開講したが、これら日本史の主題に立つ諸講演も亦、時局の要求によって行なわれたもので、聴講者は多数にのぼった。」「開館九周年記念日」には、第三高等学校教授阪倉篤太郎氏の「古典と国学」と題する記念講演会および「古事記・日本書紀展覧会」を催しているが、こうしていよいよ重大な時局下に「皇紀紀元二千六百年の年」を迎えるのである。」とあり、書籍の陳列だけでなくさまざまな講座を開催して、国民精神発揚の運動の時

流に応えた様子が伺える。当時においては、『古事記』も『日本書紀』も、展示する目的は「日本精神昂揚」のためであったといえよう。

「開館九周年記念 古事記・日本書紀展覧会」の様子については、『天理時報』に続報が見当たらない。ほかの新聞各紙や図書館彙報にも記載がなく、どの程度の反響があったのかは不明である。関連事項としては『日本文化』十七号(昭和十五年四月)に「古事記日本書紀書目―天理図書館蔵」が掲載されており、これは「昨年の天理図書館展覧会目録として出版されたものを、新しく追加補訂したもの」である。開催予告が掲載されたのが天理教信者を対象とした『天理時報』と限られており、信者以外の人々が展覧会の存在を知る手段はほとんどなかったと想像されること、続報や、ほかの媒体による関係記事も確認できないことから、この展覧会に出展数は多いものの、広く関心を集めた催しとはならなかったのではないだろうか。

* * *

『万葉集』の古写本およびその注釈書類が出陳されていたのである。この展覧会では「日本精神のあらゆる部門において、先づその根本に歸ることを必要とする上から今回は日本書紀、古事記、万葉集について貴重書、原本の姿、その解釋書及び現代の日本精神関係書を系統的に陳列したもの」であった。この『目録』⁸⁾によれば出展数は一〇一点で、後の「古事記・日本書紀展」に比べれば三分の一以下であった。しかし徐々に「日本精神」に関する書籍を追加したのである。ほかに天理図書館は、その研究雑誌『日本文化』十六号(昭和十四年四月)で「日本精神號」とする特集を組んでいる。そして『天理図書館四十年史』によれば同年の「さらに六月、古事記・日本書紀を中心とした「国史講座」を開講したが、これら日本史の主題に立つ諸講演も亦、時局の要求によって行なわれたもので、聴講者は多数にのぼった。」「開館九周年記念日」には、第三高等学校教授阪倉篤太郎氏の「古典と国学」と題する記念講演会および「古事記・日本書紀展覧会」を催しているが、こうしていよいよ重大な時局下に「皇紀紀元二千六百年の年」を迎えるのである。」とあり、書籍の陳列だけでなくさまざまな講座を開催して、国民精神発揚の運動の時

『開館九周年記念 古事記・日本書紀展覧会目録』を所蔵している図書館は、管見によれば国立国会図書館(二部)、大阪府立中之島図書館、奈良県立図書情報館、神戸市立中央図書館、天理大学附属天理図書館、東京大学史料編纂所図書室、京都大学附属図書館、高野山大学図書館である。東京大学所蔵分は工事中のため資料の確認ができなかったが、そのほかの目録は確認できた。国会図書館所蔵の一部以外はすべて、表紙の期日「自昭和十四年十月十八日」の、「十八日」の「十」字が、「自昭和十四年十月十八日」と印刷した後に、割り込ませて文字を打ったものになっている(図2)。同時に、奥付は「昭和十四年十月十五日印刷/昭和十四年十月十八日発行」となっており、発行日が開催初日である。発行部数は不明だが、おそらく表紙の期日に関してはすべて「十」を打ち込み訂正したのであろう。しかし、国会図書館所蔵のもう一方の一部だけは、「自昭和十四年十月十八日」のまま、奥付が「昭和十四年十月十八日印刷/昭和十四年十月廿三日発行」となっていた。これには「昭和十四・十・廿四 納本」の印があり、展覧会開催期間中に印刷発行され、翌日に納本されたことがわかる。期間の訂正がされていないことから、



図2 表紙（京都大学図書館蔵）

“帝国図書館”への献本用に急遽増版したものであろうか。

『目録』は大きく二部に分かれ、次のように構成されている。

甲の部

一、一年間主要増加書

乙の部

一、日本書紀の部

一、古事記の部

一、記紀の部

一、複製本の部

本稿では、紙幅の関係上『古事記』関連の書籍を中心に紹介する。「一年間主要増加書」では『古事記』関係書籍のみ、「日本書紀の部」は省略、「古事記の部」はすべて、「記紀の部」はすべて、「複製本の部」は『古事記』関係書籍のみ、さらに、目次にはないが本編最後に「追加之部」があるので、これは『古事記』関係の

書籍のみを掲載する。

なお、参考までに、古事記学会編『古事記研究文献目録・単行書篇』（国書刊行会一九九二年五月）に記載されていない明治元年以降の書籍の番号に を付した。

* * *

甲の部

一、一年間主要増加書（筆者注…この項目では『古事記』関係の書籍のみ掲載する）

四 古事記傳 卷三 本居宣長自筆 明和四年 墨付四十三枚 一冊

現在印行ノ古事記傳以前ノ稿ニシテ、更ニ修正補綴ノ入筆アレドモ、行文ハ大方異レリ。現行傳ニ至ル迄ノ道程ヲ窺フニ足ル資料トシテ最モ價値アルベシ。『須受能屋藏書』ノ印アリ。

（奥書）

明和四年丁亥五月九日 謹考穴可畏 本居宣長（花押）

八 稜威言別歌紀 草稿 橘守部自筆 三冊（一一二）

神代記ノ和歌ヲ抜き出デ、註釋セルモノ。初メ『蘆荻抄』ト名ヅケテ著者少壯ノ時著セシモノナルヲ後ニ日本紀ノ註釋『稜威道別』ヲ著スニ至リ和歌ノ註ハ凡テ此ノ書ニ譲リ題號ヲモ『稜威言別』ト改メタルナリ。コノ三冊ガ板本ノ原本トナリシモノナラン。自序ノアル點モ文章モ板本ニ甚ダ近シ。但シ『撰狀』ハ除カズニ附載セリ。表紙ニ學問所改ノ印アリ。

九 古書記傳考異 橘守部自筆 五冊

コノ書ハ『難古事記傳』又ハ『記傳慨言』以前ノモノナラン。

一〇 古書記傳考異（外題ハ『古事記傳難註』） 橘守部自筆 墨付四十二枚 一冊

- 二二 記傳慨言初稿 橘守部自筆 四冊
 『記傳慨言』三冊本ヲ淨書シ更ニ手ヲ入レタル本ニテ、コノ時本書ハ四冊ナリシト思ハル。處々ニ朱ノ書込アリ。

二三 記傳慨言 橘守部自筆 三冊
 コノ書ハ『記傳慨言初稿』四冊本ヨリ一層古キモノニテ、コノ時本書ハ三冊ナリシト思ハル。

二五 神代直語 上中下合本 橘守部自筆 墨付百三十九枚 一冊（弘化三年五月廿八日自序）
 本書ハ守部翁ノ神典解釋ノ態度ヲ最モ端的ニ表示シタルモノニテ、此點ニ於テ翁ノ著述中重要ナル地位ヲ占ムベキモノナリ。

一六 夜都米佐須の歌の辨 橘守部自筆 墨付四枚 一冊
 古事記ノ『夜都米佐須、伊豆毛多祁流賀、波祁流多知、都豆良佐波麻岐、佐味那志爾阿波禮』ノ歌ヲ解釋セシモノナリ。

二二 古事記歌 栗田土滿自筆草稿 大本 十六枚
 古事記歌百七首、書上ゲテ注ヲ施シ、先人ノ説ヲ書込メリ。

二七 古事記中卷 栗田土滿 一枚
 神武記ノ一條ヲ拔出シ註解ヲ加ヘントシタル端書タリ。

七〇 正訂古訓古事記 本居宣長加訓 四六倍版 板木 百枚（天理圖書館藏版）
 正訂古訓古事記 本居宣長加訓 小版 板木 七十二枚（天理圖書館藏版）

乙の部（同一類内ニ於テハ版本ヲ先トシ寫本ヲ後トス。配列ハ大凡年次順トセリ。）

一、日本書紀の部（筆者注：この項目は省略する）

一、古事記の部（原文）

二六 古事記 和菊倍判 三冊
 （刊記）
 寛永廿一甲申歲孟夏吉辰 洛陽書林 前川茂右衛門開板

二七 古事記 和四六倍判 三冊 京都 永田調兵衛
 『寛永廿一甲申歲孟夏吉辰 洛陽書林 前川茂右衛門開板』ノ文字アリ
 寛永二十一年版ノ後刷

二八 古事記 和菊倍大判 三冊
 （刊記）
 寛永廿一甲申歲孟夏吉辰 二條通觀音町風月宗智刊行
 献上本ナルベシ

二九 古事記 和四六倍大判 三冊
 （刊記）
 寛永廿一甲申孟夏吉辰 觀音町風月宗智刊行（二條通ノ三字ヲ脱ス）
 朱書入アリ

三〇 延佳神主校正 龍頭古事記 和四六倍大判 三冊
 貞享四年二月二十九日 豐受皇太神宮權欄宜正四位下度會神主延佳
 延佳神主校正 龍頭古事記 和四六倍判 三冊
 （跋）
 貞享四年二月二十九日 豐受皇太神宮權欄宜正四位下度會神主延佳

三一 正訂古訓古事記 本居宣長著 享和三年 和四六倍判 三冊 三重縣 山口兵助等

三二 正訂古訓古事記 本居宣長著 明治三年二版 和四六倍判 三冊 東京 永田調兵衛

三四 正訂古訓古事記 本居宣長著 和四六倍判 三冊 兵庫縣 櫻園書院
 享和三年元版
 享和三、明治三年版ノ新刻

- 一三五 訂古訓古事記 本居宣長著 明治七年 和四六判 一冊 京都 永田調兵衛
- 一三六 訂古訓古事記 本居宣長著 和四六判 三冊
明治七年四版ノ新刻本館藏版
- 一三七 訓蒙古事記 大關克、西野古海和解 明治七年 和菊判 三冊 京都 永田調兵衛
- 一三八 田中頼庸校定校訂古事記 明治二十年 和四六倍判 三冊 東京 神宮教院
- 一三九 古事記 (三部本紀卷之一、二) 松岡調編 明治廿七年 折菊倍判 二冊 高松 新井政七
- 一四〇 校定古事記 本居豐頼等校定 明治四十四年 和四六倍判 三冊 東京 皇典講究所
- 一四一 古事記 長山助實寫 天明四年 和菊判 三冊
- 一四二 譯讀古事記 川上廣樹譯註 明治二十六年 四六判 一冊 經濟雜誌社
- 一四三 古事記 (國史大系第七卷ノ内) 明治三十一年 四六判 一冊 經濟雜誌社 編
- 一四四 日本神典かな古事紀 伊藤鑄治編 西川玉壺閱 明治四十四年 三五判 一冊 東京 興辰商會
- 一四五 古事記 (有朋堂文庫) 塚本哲三校 大正十一年 三六判 一冊 東京 有朋堂
- 一四六 註譯古文事記 櫻園書院編輯部譯註 大正十二年 四六判 一冊 大阪 櫻園書院
- 一四七 古事記普及本 井篁節三編 大正十五年 四六判 一冊 東京 平凡社
- 一四八 古事記 (日本古典全集) 正宗敦夫編纂校訂 昭和三年 三五判 一冊 東京 日本古典全集刊行會
- 一四九 古事記 藤村作編 昭和四年 菊判 一冊 東京 至文堂
- 一五〇 校古事記 佐伯常磨校註 昭和四年 菊判 一冊 東京 國民圖書株式會社
- 一五一 要註國文定本總纂古事記 植松安校註 昭和四年 四六大判 一冊 東京 廣文堂
- 一五二 訂古訓古事記 本居宣長編 昭和四年 菊判 一冊 東京 松雲堂
- 一五三 古事記 植松安校註 昭和六年四版 四六大判 一冊 東京 大倉廣文堂
- 一五四 校異集成古訓古事記 田井嘉藤次著 昭和七年 菊判 一冊 東京 大同館
- 一五五 古事記 (日本古典全集基本本版ノ内) 正宗敦夫編 昭和九年 三六判 東京 日本古典全集刊行會
- 一五六 古事記 (岩波文庫教科書版) 幸田成友校訂 昭和十年五版 四六判 一冊 東京 岩波書店
- 一五七 古事記 (岩波文庫第六冊) 幸田成友校訂 昭和十年十四版 三五判 一冊 東京 岩波書店
- 一五八 古事記 (雄山閣文庫第一部第一卷) 雄山閣編輯部編 昭和十一年 三四判 一冊 東京 雄山閣
- 一五九 古事記 (新訂國史大系第七卷) 黑板勝美編 昭和十一年 菊判 一冊 東京 國史大系刊行會
- 一六〇 古事記 (いてふ本) 三教書院編輯部編 昭和十一年十版 和四六判 一冊 東京 三教書院
- 一六一 KO-JI-KI (古事記) or "Records of ancient matters" Basil Hall Chamberlain 譯 一八八二年 菊判 一冊 Yokama
- 一六二 Translation of "Ko-Ji-Ki" (古事記) or "Records of Ancient Matters" Basil Hall Chamberlain 譯 1932. 一冊 Kobe J. L. Thompson & co.,
チエムバーレン英譯古事記
- 一六三 Translation of "Ko-Ji-Ki" (古事記) or "Records of Ancient Matters" Basil Hall Chamberlain 譯 1938. 一冊 Kobe J. L. Thompson & co.,
(解意書)
- 一六四 古事記燈 富士谷成元著 寫本 和菊判 一冊
(卷末記)
文化四年丁卯仲冬
- 一六五 古事記燈 於富牟泥 富士谷成元著 文化五年 和四六倍判 二卷二冊

今井喜兵衛等

一六六 古事記燈 富士谷成元著 岡三郎校訂 大正十四年 菊判 一冊 東京

古今書院

一六七 古事記 中卷 栗田土滿著 一枚(甲ノ二十七ニアリ)

一六八 古事記裏書 兼文註 尚古攷證閣校本 文政五年 和四六倍判 一冊

一六九 古事記略解 半井梧庵自筆草稿 和菊判 三冊

一七〇 古事記略講 上下 梅田春濤著 寫本 和菊判 二冊

一七一 村上忠順古事記標註 明治七年 和四六倍大判 三冊 愛知縣 近藤巴太

郎

一七二 孝泉略解古事記 多田孝泉著 明治七年 和菊判 二冊 東京 和泉屋庄

次郎

一七三 古事記略解附録 三國幽眠著 明治七年 和四六判 一冊 京都 永田調

兵衛

一七四 三國幽眠略解古訓古事記 明治八年 和四六倍判 三冊 京都 永田調兵衛

一七五 龍頭標目神代卷御古記 增井久次郎著 明治二十九年 和四六判 一冊 滋賀

縣 益智新友社

一七六 古事記通玄解 吳來安撰 明治十一年 和四六倍判 二冊 神戸 撰者

一七七 註標古事記讀本 加藤高文著 村岡良弼校閲 明治二十五年 和菊判 三冊

東京 青山堂

一七八 古事記講義(學階試験科目全書第三、七卷) 四六判 二冊 東京 水穂會

第三卷 佐伯有義著 明治廿六年四版

第七卷 井口隆太郎著 明治廿五年

一七九 古事記講義 大久保初雄著 明治廿九年四版

和四六判 三冊 大阪 吉岡寶文軒

一八〇 明治三十三年九版 四六判 一冊

一八一 大正元年十二版 四六判 三冊

東京 鈴木常次郎

一八二 大正十五年十四版 四六判 一冊

大阪 櫻園書院

一八三 古事記通解 當山亮道著 明治三十二、三年 和四六判 三冊 東京 攷

古社

一八四 日本上古史評論 原名英譯古事記 チェンバーレン著 飯田永夫譯 明治

三十三年訂正二版 菊判 一冊 東京 國語傳習所

一八五 校註古事記讀本 井上賴文校註 明治四十二年七版 菊判 一冊 東京

小川尚榮堂

一八六 古事記考 井上賴圀著 明治四十二年 和菊判 一冊 東京 明治書院

一八七 日本神典原文古訓三體古事記 澁川柳次郎(玄耳)著 明治四十四年 菊判

一冊 東京 有樂社

一八八 訂正增補三體古事記 澁川柳次郎(玄耳)著 大正八年訂八版 菊判 一冊

東京 誠文堂書店

一八九 古事記講義 佐伯有義著 本居豐穎閣 皇典講究所水穂會編 大正三年二

十五版 四六版 一冊 東京 皇學院

一九〇 古事記(日本國粹全書第七輯) 日本國粹全書刊行會編 大正六年 四六判

一冊 東京 編者

一九一 古事記講義 皇典講究所水穂會編 大正六年廿八版 和四六判 一冊 東

京 寶文館

一九二 古事記(註)日本文學叢書第十二冊) 物集高量編 大正七年 菊判 一冊

東京 廣文庫刊行會

一九三 日本神典日本古事記 澁川柳次郎(玄耳)著 大正九年 四六判 一冊 東京

誠文堂

一九四 古事記通釋 池邊義象編 大正十年 菊判 一冊 東京 啓成社

一九五 古事記通俗講義 美濃部伴郎著 大正十年 菊判 一冊 福井縣 著者

一九六 古事記神話の新研究 石川三四郎著 大正十年 四六判 一冊 東京 三

德社

一九七 大正十年二版 四六判 一冊

一九八 大正十三年十版 四六判 一冊

東京 白揚社

一九九 古事記神代卷（世界聖典全集第一卷）加藤玄智編 大正十一年 菊判 一冊

東京 世界文庫刊行會

二〇〇 古事記^{（新）}（日本文學叢書第七卷）物集高量編 大正十三年 菊判 一冊

東京 日本文學叢書刊行會

二〇一 古事記^{（神聖遺訓として見たる）} 水野萬年著 大正十三年 菊判 一冊 名古屋 古事記研究會

研究會

二〇二 古事記新釋 植松安著 大正十三年十版 四六判 一冊 東京 大同館

二〇三 古事記新講 次田潤著 大正十三年 菊判 一冊 東京 明治書院

二〇四 大正十四年五版 菊判 一冊

二〇五 昭和十二年二十五版 菊判 一冊

二〇六 新譯古事記 望月世教著 大正十四年 四六判 一冊 東京 春秋社

二〇七 古事記に於ける特殊なる訓法の研究 三矢重松著 大正十四年 菊判 一冊

東京 文學社

二〇八 古事記講義 佐伯有義著 本居豐顯閣 水穂會編 大正十五年 菊判 一冊

大阪 櫻園書院

二〇九 少年古事記物語 宮崎久松著 大正十五年 四六判 一冊 東京 大同館

二一〇 昭和四年三版 四六判 一冊

二一一 昭和十二年 四六判 一冊

二一二 古事記大講 第一—三十卷（第二卷欠）水谷清著 昭和三十八年 菊判 二十九冊 名古屋 古事記大講刊行會

二二三 古事記全釋 植松安著 大塚龍夫著 昭和二年九版 菊判 一冊 東京 廣文堂

二二四 昭和九年四版 菊判 一冊 東京 不朽社

二二五 昭和十三年 菊判 一冊 東京 大明社

二二六 科學より觀たる古事記 淺野正恭著 昭和三年 四六判 一冊 東京 嵩山房

二二七 校註古事記讀本 井上賴文校註 昭和三年訂十三版 四六判 一冊 東京

芳文堂

二二八 古事記概説 田中義能著 昭和四年 菊判 一冊 東京 日本學術研究會

二二九 昭和四年二版 菊判 一冊

二三〇 古事記論 中澤見明著 昭和四年 菊判 一冊 東京 雄山閣

二三一 古事記新註 笠原節二 昭和四年 菊判 一冊 東京 文學社

二三二 古事記の鑑賞 新屋敷幸繁著 昭和五年 四六判 一冊 東京 大同館

二三三 昭和十年 四六判 一冊

二三四 古事記真釋 岸一太著 昭和五年 菊判 一冊 東京 交蘭社

二三五 詳解古事記新考 田井嘉藤次著 昭和五、六年 菊判 三冊 東京 大同館

二三六 古事記新釋 岡田稔著 昭和六年 四六判 一冊 名古屋 正文館

二三七 古事記の研究^{（岩波講座日本文學）} 倉野憲司著 昭和六年 菊判 一冊 東京 岩波書店

二三八 全譯古事記精解 澤田總清著 昭和六年 四六判 一冊 東京 健文社

二二九 古事記神代（賀茂真淵全集第十二卷ノ内）賀茂百樹增訂 昭和七年 菊判 一冊 東京 吉川弘文館

二三〇 新譯古事記 笛木讓治著 昭和七年 菊判 一冊 東京 ログス書院

二三一 昭和十年 菊判 一冊 東京 荻原星文堂

二三二 昭和十三年 菊判 一冊 東京 大洋社

二三三 古事記評釋 中島悅次著 昭和八年二版 菊判 一冊 東京 山海堂出版部

二三四 精要古事記詳解 橘文七著 昭和八年 四六判 一冊 東京 新進社

二三五 新釋古事記 西岡操著 昭和八年 四六判 一冊 大阪 湯川弘文社

二三六 古事記神話の新研究 石川三四郎著 昭和八年 菊判 一冊 東京 曉書院

二三七 新訂古事記 武田祐吉編 昭和九年 四六判 一冊 東京 三省堂

二三八 昭和十二年五版 四六判 一冊

二三九 神典古事記講話 植木直一郎著 昭和九年 四六判 一冊 東京 章華社

二四〇 古事記の成立（國民精神文化研究第一年第一冊）松本彦次郎著 昭和九年

四六倍判 一冊 東京 國民精神文化研究所

二四一 古事記綱要(日本宗教講座) 佐伯有義著 昭和九年 菊判 一冊 東京

東方書院

二四二 註譯參考古事記 阿部政一編 昭和九年 四六判 一冊 東京 中文館

二四三 古事記 藤村作編 昭和十年七版 菊判 一冊 東京 至文堂

二四四 古事記序文講義 山田孝雄著 昭和十年 菊判 一冊 宮城縣 志波彦神社 鹽竈神社

社

二四五 古事記選釋 阪倉篤太郎著 昭和十年 菊判 一冊 東京 日本文學社

二四六 昭和十二年二版 菊判 一冊

二四七 體三古事記全釋 大塚龍夫著 昭和十年 四六判 一冊 東京 大倉廣文堂

二四八 古事記の研究(古典の研究ノ内) 折口信夫著 昭和十一年 菊判 一冊

長野縣 信濃教育會 下伊那部會第七支會

二四九 自學古事記新釋 橋文七著 昭和十一年 四六版 一冊 東京 金鈴社

二五〇 古事記(物語日本文學第一卷) 藤村作等譯 昭和十一年 四六判 一冊

東京 至文堂

二五一 古事記燈(富士谷御杖集第一卷) 富士谷御杖著 國民精神文化研究所編

昭和十一年 菊判 一冊 東京 編者

二五二 古事記講話 渡部義通著 昭和十一年二版 菊判 一冊 東京 白揚社

二五三 古事記の新研究 倉野憲司著 昭和十二年 四六判 一冊 東京 至文堂

二五四 古事記と建國の精神(日本精神叢書) 植木直一郎著 昭和十二年 四六判

判 一冊 東京 日本文化協會出版部

二五五 古事記物語 鈴木三重吉著 昭和十二年 四六判 一冊 東京 中央公

論社

二五六 日本神話古事記物語 金の星社編 昭和十三年 四六判 一冊 東京 編者

二五七 古事記神代篇の正しき解釋 二木謙三著 昭和十三年 菊判 一冊 東京

大日本養正會

二五八 詳解古事記 宮下幸平著 昭和十四年三版 四六判 一冊 東京 芳文堂

二五九 古事記傳卷三 本居宣長自筆 明和四年 墨付四十三枚 一冊 (甲ノ四

ニアリ)

二六〇 古事記傳 薄葉本 本居宣長著 天保十五年二版 和四六倍判 十五冊

名古屋 永樂屋東四郎

二六一 古事記傳 本居宣長著 明治八年 和四六倍判 四十八冊 愛知縣 片野

東四郎藏版

二六二 辨古事記傳 本居宣長著 寫本 和四六倍大判 一冊

(卷末記)

寛政六年五月二十一日 平高潔 謹識

源安續 藏書

二六三 古事記傳抄註 一之卷 寫本 和四六倍判 一冊

二六四 古事記傳(本居宣長全集第一一三) 本居宣長著 本居豐顯校訂 明治三十

四年 菊判 三冊 東京 吉川半七

二六五 古事記傳(補本居宣長全集第一一四) 本居宣長著 本居豐顯校訂 本居清

造再校訂 大正十五年 增訂二版 菊判 四冊 東京 吉川弘文館

二六六 訂古事記傳 本居宣長著 本居豐顯校訂 大正九年(一、二)十年(三、

七)五版(一六) 菊判 七冊 東京 吉川弘文館

二六七 難古事記傳(橘守部全集第二) 橘守部著 橘純一編 大正十年 菊判 一

冊 東京 國書刊行會

二六八 古事記傳索引 日本名著刊行會編輯部編 昭和五年 四六判 一冊 東京

同會

二六九 古事記傳 索引共 本居宣長著 向山武男校訂 昭和五年 四六判 六冊

東京 日本名著刊行會

二七〇 訂古事記傳 本居宣長著 本居豐顯校訂 本居清造再校訂 昭和五、十年

增訂五(上)六(下)版 菊判 二冊 東京 吉川弘文館

二七一 古事記傳略 吉岡徳明著 昭和十三年 菊判 二冊 東京 國民精神文化

研究所

二七二 古事記傳考異 橘守部自筆 五冊(甲ノ九ニアリ)

二七三 古事記傳考異 外題『古事記傳難註』一 橘守部自筆 一冊(甲ノ十二

アリ)

一、記紀の部(附歌謡)

- 二七四 記傳概言 初稿 橘守部自筆 四冊 (甲ノ十二ニアリ)
- 二七五 記傳概言 橘守部自筆 三冊 (甲ノ十三ニアリ)
- 二七六 神代正語 本居宣長著 和四六倍判 三卷三冊 東京 須原屋茂兵衛等
- 二七七 神代直語 上中下合本 橘守部自筆 墨付百三十九枚 一冊 (弘化三年五月廿八日ノ自序) (甲ノ十五ニアリ)
- 二七八 神代正語常磐草 細田富延著 天保二年 和四六倍判 三卷三冊 東京 須原屋茂兵衛
- 二七九 神代正語常磐草 細田富延著 和四六倍判 三卷三冊 京都 吉野屋仁兵衛
- (跋)
- 二八〇 神代評撰記 日宣著 和四六倍判 五冊
- [天保三年ノ跋アリ]
- 二八一 古事記及び日本書紀の-new研究 津田左右吉著 大正九年四版 菊判 一冊 東京 洛陽堂
- 二八二 古事記及び日本書紀の研究 津田左右吉著 大正十三年 菊判 一冊 東京 岩波書店
- 二八三 日本古典研究 植木直一郎著 昭和二年 菊判 一冊 東京 大朋堂
- 二八四 新皇學叢書第一卷 物集高見編 昭和四年 菊判 一冊 東京 廣文庫刊行會
- 二八五 上代文學集 (校註) 日本文學類從第一卷 武田祐吉編 昭和四年 菊判 一冊 東京 博文館
- [二八六] 日本紀和歌略註 (賀茂真淵全集第十卷) 賀茂百樹増訂 昭和五年 菊判 一冊 東京 吉川弘文館
- 二八七 紀記論究 神代篇 松岡靜雄著 昭和六年 四六判 六冊 東京 同文館
- 二八八 古事記新論考 (奈良文化第二十六號) 辰巳利文編 昭和八年 菊判 一冊 奈良縣 竹柏會大和支部
- [二八九] 紀記對照批判 岩一太著 昭和八年 菊判 一冊 東京 明道會
- 二九〇 上中古文學論攷 倉野憲司著 昭和九年 菊判 一冊 東京 叢文閣
- 二九一 上代日本文學の研究 久松潜一著 昭和十年七版 菊判 一冊 東京 至文堂
- 二九二 記紀の研究 (歷史公論第五卷第四號) 雄山閣編 昭和十一年 菊判 一冊 東京 編者
- 二九三 古事記・日本書紀抄 (現代語譯國文學全集第一卷) 植木直一郎譯 昭和十一年 四六判 一冊 東京 非凡閣
- 二九四 神典 大倉精神文化研究所編 昭和十一年 三五判 一冊 横濱 編者
- [二九五] 資料集成 大和時代概觀 藤澤親雄等編 昭和十一年 菊判 一冊 東京 金星堂
- 二九六 紀記歌集 林諸島著 和四六倍判 二冊 東京 富谷徳右衛門
- [天明八年ノ序アリ]
- 二九七 日本紀歌解機乃落葉 荒木田久老撰 和四六倍判 三冊 東京 須原屋茂兵衛等
- 二九八 神武紀和歌鈔八首 寫本 和四六倍判 一冊
- (卷末記)
- 元祿十二戊卯七月十八日 高田正方
- 二九九 古事記日本書紀歌 寫本 本居宣長著 和四六倍大判 一冊
- (與書) 天明六年
- 三〇〇 稜威言別 (紀記歌解) 橘守部自筆 自一至三三冊 (甲ノ八ニアリ)
- 三〇一 古事記歌 栗田土滿自筆草稿 大本 一冊 (甲ノ二十二ニアリ)
- 三〇二 夜都米佐須の歌の解 橘守部自筆 一冊 (甲ノ十六ニアリ)
- 三〇三 厚顔抄 (内題日本書紀和歌略註) 寫本 和四六倍判 三冊
- 三〇四 日本書紀傳開宴歌集告文 寫本 和菊判 一冊

(巻末記)

明治四十四年三月七日就大瀧光賢手書本校訂畢 羽前國西田川郡大山

秋野庸彦

三〇五 日本歌選 上古之巻 佐々木信綱著 明治四十二年 四六判 一冊 東京 博文館

三〇六 紀記歌集講義 太田水穂著 大正十一年 四六判 一冊 東京 洛陽堂

三〇七 紀記の歌の新釋 植松安著 大正十二年 四六判 一冊 東京 大同館

三〇八 國語の胎生及び發達 五十嵐力著 大正十三年 菊判 一冊 東京 早稲田大學出版部

三〇九 紀記歌集講義 太田水穂著 大正十五年 菊判 一冊 東京 共立社

一、複製本の部

(筆者注…この項目では『古事記』関係の書籍のみ掲載する)

三三八 古事記上巻抄 眞福寺本 大正十三年 折菊倍大判 一冊 東京 古典保存會

三三九 古事記 眞福寺本 大正十四年 四六倍判 一冊 東京 古典保存會

三三〇 古事記裏書(神宮文庫) 大正十四年 四六倍判 一冊 東京 古典保存會

三三一 古事記上巻 春瑜本 昭和五年 四六倍判 一冊 東京 古典保存會

三三二 古事記上巻 伊勢本 昭和十一年 和四六倍判 一冊 東京 古典保存會

三三三 古事記 猪熊信男氏所藏本 昭和十二年 和菊倍判 一冊 東京 古典保存會

追加之部

(筆者注…この項目では『古事記』関係の書籍のみ掲載する)

三三二 通古事記新釋 井上友吉著 大正十年 四六判 一冊 東京 千山閣書店

三三三 現代語に全譯せる古事記 福原武譯 大正十年 四六判 一冊 東京 洛陽堂

三三四 文古事記物語 (The story of Ancient Japan or tales from the Kojiki) 磯邊彌一

郎著 昭和三年 三五判 一冊 東京 三角社出版部

三三五 校定^{眞淵}訓古事記神代巻 岡田米夫等編 昭和八年 菊判 一冊 神宮皇

學館史學會

三三六 神典古事記畫譚 澁川柳次郎(玄耳)著 昭和九年 四六判 一冊 東京 資文堂書店

三三七 古事記(中等國文解釋叢書第十二篇) 松井博信著 昭和十一年十七版 四

六判 一冊 東京 立川文明堂

三三八 古事記新講義 橘文七著 昭和十四年五版 四六判 東京 大明社

三三九 古事記傳略草稿 半井梧庵自筆 和四六判倍 四冊

三四〇 神代の研究 福田芝之助著 大正二年 菊判 一冊 京都 若林春和堂

三四二 神代御系圖 平田篤胤 折一帖

注

(1) 「古事記撰上千年記念祭」は一九二一(明治四十四)年三月十九日に東京靖国神社で開催された。「古事記まつり」は一九四二(昭和十七)年十一月二十三日に神田共立講堂で開催。「古事記展覧會」は一九四三(昭和十八)年一月三十・三十一日に東京帝國大學で開催された。

(2) 及川智早「近代における『古事記』『日本書紀』に関する記念会・展覧會について——明治期の古事記記念祭と昭和十八年の古事記展覧會を中心に——」(古事記研究大系二『古事記の研究史』高科書店 一九九九年六月)、同「古事記展覧會出陳目録」について(『古事記年報』四十一号 一九九九年一月)。

(3) 『帝京大學新聞』(一九四三(昭和十八)年二月一日)。ほかに『日本學藝新聞』(一九四三年二月一日)では「古事記展」空前の賑ひ 篤學の入場者一萬を越ゆ」という見出しの記事を掲載している。

(4) 及川智早「尾張名古屋で開催された古事記・日本書紀展覧會について——紀元二千六百年(昭和十五年)奉祝記念展の概要」(『帝塚山学院大學日本文学研究』第三十四号 二〇〇三年二月)。

(5) 『大阪朝日新聞』奈良版、『大阪毎日新聞』奈良版、『奈良新聞』の、一九三九(昭和十四)年九月十五日、十一月十日の期間を調査したが、展覧會に関する記事は確認できなかった。

(6) 天理圖書館『天理圖書館四十年史』(天理大學出版部 一九七五年四月)の「概説 館

内の諸行事」「参考資料六 講演会一覧」による。

- (7) 同展覧会の目録には会期が一月二十四日～二月六日とあるが、「天理図書館彙報」(『日本文化』(天理図書館) 第十七号 昭和十五年四月) および『天理図書館四十年史』には一月二十四日～二月二十日とある。

- (8) 『天理時報』一九三九(昭和十四)年一月二十九日三面の「興亞の春飾る『日本精神關係書展』天理図書館で開催」記事による。

- (9) 『日本精神關係書展観目録』(日本書紀・古事記・萬葉集之部)。表紙に期日と開催場所(於 天理図書館二階参考品室) が記載されている。

- (10) 前出『天理図書館四十年史』によれば「国史講座」を五回開催している。大阪商科大学教授・山根徳太郎「日本文化史論」、文学博士・梅原末治「大和の考古学」(六月十七日)、法学博士・牧健二「日本の家族国家の性質及価値」(六月二十四日)、田村吉永「大和の条里制度について」、末永雅夫「日本刀の歴史」(六月二十九日)、池田源太「我国貴族政治の特質」、文学博士・西田直二郎「日本の表現」(七月一日)、京都帝国大学講師・源豊宗「日本美術における余韻」(七月十一日)。ただし、前出「天理図書館彙報」によれば六月二十二日にも「国史講座(第二日) 講師山根徳太郎氏」とあり全六回になっており、他にも講演者の異同が見られる。

- (11) 開催期間中に天理教の秋季大祭(十月二十六日)があり、大勢の信者が集まった模様は『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』(ともに奈良版十月二十七日)が写真付きで掲載しているが、展覧会については触れていない。

- (12) 『日本文化』十七号(昭和十五年四月)の「編輯後記」による。前年の国史講座開講に關しては解説があるが、「展覧会」自体については触れられていない。